

<令和8年度 未来を創る学力向上支援事業に係る未来を創る授業力向上協議会（小学校理科）>

1. 目 的

各小学校及び義務教育学校前期課程の教員等を対象に、学習指導要領の趣旨を踏まえた小学校理科の授業改善等に関する説明・協議等を通して、小学校教員の授業力向上に資する。

2. 主 催 大分教育委員会

3. 期 日 令和8年5月29日（金）

4. 場 所 コンパルホール 多目的ホール



5. 内 容

【開会行事】

「挨拶」義務教育課 課長 桐野 潤

- ・令和7年度全国学力・学習状況調査では小学校理科におけるすべての項目で、全国平均値を上回っている。
- ・先生方には、「好き」「わかる」を大切にされた授業を行っていただいている。その結果ではないか。
- ・一方で、子どもたちの理科離れも叫ばれている中、大分県の課題や必要な取組について、有本調査官からご示唆をいただきたい。

【行政説明】

「大分県における小学校理科の課題と授業改善」

説明者：義務教育課 指導主事 平松 秀敏



【大分県における理科の現状と課題】

- ・大分県では、小学校理科に対する興味・理解は高く、観察・実験を取り入れた授業が子どもの主体的な学びにつながっている。
- ・一方で、理科の有用性は感じているものの、学んだことを日常生活で活用したり、将来の職業につなげて考えたりすることには課題がある。
- ・また、社会の事象を基に問題を見いだしたり、学習内容と社会を関連付けたりする力の育成が求められており、社会とのつながりを意識した授業づくりが重要である。

【問題解決の過程を意識した授業改善】

〔協議テーマ〕

○令和7年度全国学力・学習状況調査4（1）の問題のように、社会の課題に目を向け、実験結果や資料を根拠として説明できる児童を育成するためには、どのような指導の工夫が必要か。

〔協議〕

◎社会課題に目を向ける児童の育成

- ・実際に自分が暮らしている地域の過去の災害などを基にした学習。地域素材を生かす。
- ・「なぜ？」などの子どもの困りや疑問を題材にする。
- ・社会課題以前に、子どもたちに社会に関心を向けさせる工夫が必要ではないか。
- ・国語科や社会科等、教科横断的な取組が必要ではないかと考える。

◎実験結果や資料を根拠として説明できる児童の育成

- ・説明の根拠なるものを子ども自身で明らかにさせる。
- ・理科の授業で行った実験や考察を根拠にして、社会課題を考えさせる。
- ・実験や考察を入念に行い、そこから説明に入ることが必要だと考える。

〔まとめとして〕

- ・授業者自身が、新聞やニュースなどで情報収集をすることを心がける。
⇒普段から大人が社会とのつながりを意識する、社会に目を向ける習慣を子どもに見せていく。
- ・問題解決の過程の中で、「結果」「考察」「結論」をしっかりと区別して考えさせる。
- ・子どもたち一人一人に価値づけを行っていくことが大切になる。

【講義】

「魅力ある理科の授業づくりに向けて」

講師：国立教育政策研究所 教育課程調査官・学力調査官 有本 淳 氏



先生方の協議を聞いていて…

- 指導に当たっては、方略・価値・コスト（心的・物理的）に配慮
 - ・「理科が好き」の落ち込み ・「生活の中で生かす」肯定的回答の低さ ・理数系人材の確保
- バランスよく資質・能力を育成すること
 - ・子どもが社会生活と理科を結び付けて考えられるよう、「社会生活に目を向ける」視点を育てることが重要である。また、昆虫嫌いや書くこと・考察が苦手な子どもへの支援を授業者の課題として捉え、個に応じた指導を工夫していく必要がある。
 - ・考察では「型」を活用することは有効だが、型を与えるだけでは負担感につながる。子ども自身に型を考えさせたり、友達のよい考察を参考にしたりするなど、方略だけでなく、価値やコストにも配慮した授業づくりが重要である。
 - ・今後、理系人材の不足が予測される中、国は理系人材の確保に向けた取組を進めている。その背景には、理系進路に関する固定観念（バイアス）の存在があり、その改善に向けた様々な施策が進められている

★「理科を学ぶ意義（価値や重要性）とはなにか？」

- ⇒「自然や社会の事象・言説を、自然科学的な視点から捉え、
観察・実験の結果や科学的知見などに基づいて、客観的、論理的、批判的に考察すること」

【理科で育成を目指す資質・能力】

○小学校理科の目標

- ・目標の中で、特に「見通しをもって問題解決をしている」かが授業者に問われている。

○問題解決の過程

「問題の設定」⇒「予想や仮説の設定」⇒「解決の方法の設定」

⇒「観察・実験の実施」⇒「結果の整理」⇒「考察」⇒「結論の導出」

- ・先生方の中では、「問題の設定」や「考察」に難しさを感じている方が多い。
- ・「解決の方法の設定」を導き出す「予想や仮説の設定」に留意する必要があるのではないか。
- ・「問題の設定」から「結論の導出」までを一貫した筋道でつなぐことが重要であり、授業者のねらいによって、同じ教材でも単元構成や授業展開は変わる。

○考察の場面において

- ・考察指導では、児童の実態（考察の捉え方・これまでの指導・課題）を把握することが重要である。
- ・考察を書く力は、習慣だけでなく、考察を書く意義や価値を児童が理解していることが基盤となる。
- ・考察では、事実だけでなく、その事実をどう解釈したかを記述することが重要であり、検証や反証を踏まえた児童の考えが表れるよう指導する必要がある。
- ・考察に決まった形式はなく、「問題」をどのように捉えるかを児童と共有しながら、「考察」と「結論」の内容を考えていくことが大切である。
- ・授業者は、児童がどのような考察を書けば評価基準（B 評価）を満たすのかをあらかじめ具体的に想定しておくことが重要である。
- ・発問や教師の働きかけを工夫し、考察の進め方を具体的に指導する必要がある。
- ・授業後は、自身の指導を振り返り、改善を次の授業につなげることが大切である。

【次期学習指導要領の改訂に向けた検討状況】

- ・理科ワーキンググループでの検討は終了し、小・中・高を見通した理科教育の充実や「深い学び」の実現が大きな方向性として示された。
- ・「深い学び」は、知識・技能と思考・判断・表現を一体的に育成し、教科横断や社会とのつながりを重視することが重要である。
- ・「問題解決的な学び」は「探究的な学び」へと表現が変わる可能性はあるが、基本的な考え方は変わらない。今後、内容や授業時数の整理が検討されるが、引き続き問題解決型の学びを大切にした授業づくりが求められる。